



青年海外協力隊マレーシア会 15号

マレーシアへの協力隊派遣の変遷

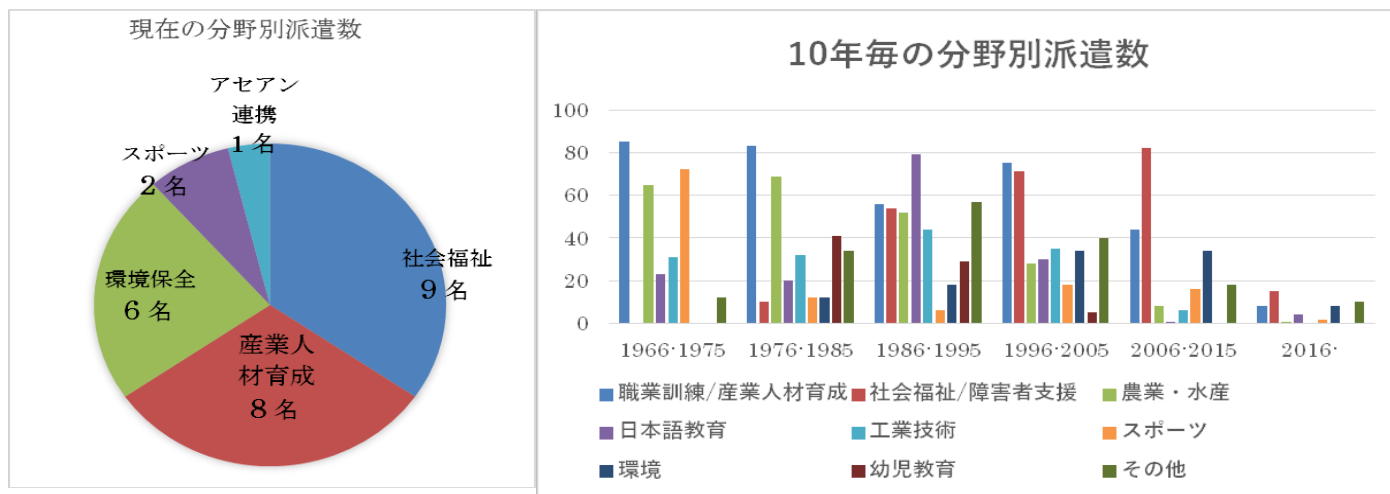
渡辺 幸 JICA マレーシア事務所 企画調査員（ボランティア事業）

はじめに

元号が令和へと変わり、昭和から始まった協力隊派遣事業も、昭和・平成・令和の3代となりました。隊次の呼称は2016-2次隊より西暦表示を採用していますが、7月には令和最初の隊次である2019-1次隊がクアラルンプールへ到着します。

マレーシアへのボランティア派遣事業

2019年5月末でマレーシアへのボランティア総派遣数は1589名となりました。5月31日現在、26名（シニア海外ボランティア7名／青年海外協力隊19名）がここマレーシアで活動しています。特別支援学級や、精神障害者向けの就労支援といった障害児・者支援、廃棄物分別を啓発推進する環境教育、職業訓練校で講師への工作機械等専門技術の指導といった分野で活動しており、珍しいところでは新体操や野球のスポーツコーチとしての派遣もあります。



派遣開始当初の1960～70年代は、スポーツや農業・水産といった分野が中心でしたが、現在は、社会福祉分野、産業人材育成分野、環境保充分野を中心に派遣しており、50年の時を経て、徐々に派遣職種や分野は変化しつつあります。全体的な派遣数をみると、職業訓練／産業人材育成の分野が派遣開始当初から派遣数が多く、351名を派遣しています。次に派遣数が多いのは、社会福祉／障害者支援分野で、232名派遣しています。特に技術協力プロジェクトを実施していた1996年からの20年間では153名を派遣していました。近年派遣が開始され、現在の重点分野でもある環境保全の分野では、BBEC（ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム）が開始された2000年代前後から派遣が増え、すでに106名の派遣実績があります。

2018年にマハティール首相が建国以来初となる政権交代を実現してから、マレーシア国内では、再び日本に学ぼうと日本に向け熱い視線が送られ、日本が得意とする産業分野や、日本式の教育などの分野への協力隊派遣が再び注

目を浴びています。将来の配属先となり得る方々に、協力隊事業について説明する機会が多くありますが、地方へ行くほど、「以前の勤務先に JOCV がいた。」「子供のころ、JOCV が近所に住んでいた」などの話を伺う事があります。やはり派遣数が多いというものの理由のひとつだと思いますが、特にサバ州では、JOCV を知っている、という方に高い確率でお会いします。

マレーシア事務所の今昔



1984年頃 Jalan Yap Kwan Seng オフィスの前で Roshida さんとドライバーの Ariffin さん



1985年頃 JOCV 担当の Mary さんと Roshida さん

でもあり、彼らが時には友人として、家族として常にそばでサポートしてくれたからこそ、1589 名もの JOCV、SV を受け入れ、そして帰国を見届けることができたのだと改めて感じています。

これから

ロシーダさんからお借りした当時の写真を拝見すると、今と変わらない、はつらつとした皆さんの笑顔があり、なんだか嬉しくなります。いつの時代も派遣されてくる皆さんのあふれんばかりのエネルギーは、私たちを笑顔にする何かがあるのだと思っています。これからも、少しずつ変化をしながらマレーシアでの協力隊事業が続き、多くの笑顔迎え、見守ることが出来るよう、事務所スタッフ一同でサポートできれば幸いです。マレーシアへお立ち寄りの際は、ぜひマレーシア事務所まで足を延ばしてください。ナショナルスタッフが、昔と変わらない陽気で温かい笑顔で

迎えてくれます。念のため、当事務所のランチの時間は午後 12 時から 1 時の間です。その時間帯は誰もいないかもしれないので、お気を付けください・・・！



ドライバーの Rama さん（中央）の定年退職記念写真。なつかしい顔はありますか？（2019年3月）

現在、マレーシア事務所は 1999 年に移転した Menara Citibank の 29 階で、日本人所員 8 名、ナショナルスタッフ 14 名とドライバー 4 名の計 26 名で業務にあたっています。マレーシア事務所を訪問すると、いつも笑顔で迎えてくれる ロシーダさんは今も事務所の看板娘として現役です。30 年以上前に派遣されていた JOCV や、当時のオフィスの様子などを鮮明に覚えていて、写真をみながら、皆さんの名前がすぐに出てくるのにはいつも驚かされます。今回、その当時の写真を少し拝借しました。1980 年代、Jalan Yap Kwan Seng オフィスにて。現在も事務所員や隊員がお世話になっているレストラン・スタジアムネガラそばだったと伺っています。Jalan Yap Kwan Seng は今、高層ビルの建築ラッシュで、私が赴任してからの 3 年間でも日々風景が変化しており、残念ながら今は当時の面影はほとんどないかもしれません。

次は、Wisma Sime Darby での受付での一枚です。一緒に写っているのは、2004 年から協力隊事業をサポートして下さっているヌルルさんです。入所当時は GA（総務）の担当でした。

マレーシアの協力隊派遣の歴史は、

それを支えるナショナルスタッフの歴史



1997年 Wisam Sime Derby オフィスにて Roshida さんと Noorul さん

*派遣数、人数などはすべて 2019 年 5 月末時点の情報です。

JICA マレーシア事務所：

Tel: +60(3)2166-8900 Email: ms_oso_rep@jica.go.jp

Suite 29.03, Level 29, Menara Citibank, 165, Jalan Ampang,
50450, Kuala Lumpur, Malaysia

マレーシアでの日本語教育

渡辺里保（2017年度4次隊 日本語教育）

私は現在、クアラルンプールにある大学で日本語を教えています。大学時代に、日本語教育実習でマレーシアのジョホールバルを訪れたのが私にとっての初めての海外で、今はそのとき訪れた大学のクアラルンプール校で日本語を教えているため、マレーシアにはなんだか不思議な縁を感じています。

私の活動先の大学は日本式の工学教育を行っており、学部生は日本語が必修科目です。活動は主に、日本語の授業とイベントなどの授業外活動があります。授業は主に、学部生対象の文法クラスと会話クラス、大学院生クラス、日本語能力試験の対策クラスなどを担当しています。これらの他に、**Japan Day** や日本文化に関連した定期イベント、日本語でお話する日本語カフェ、ヘルプデスクなどを計画、開催しています。そのため学期期間中はかなり忙しい毎日を過ごしていますが、やりがいを感じることもたくさんあります。例えば、日本関連のイベント、特に **Japan Day** などの大きなイベントでは日本人の協力に加えて日本関連の物品も多く必要になります。当然活動先の大学だけではまかなえないため、大使館や他機関と連絡を図り協力をあおがなければなりません。日本関連のイベントはボランティアとカウンターパートで担当しているため、一人一人の役割や責任は大きいですが、日本で日本語を教えていたらきっと経験できないようなことばかりなので、やりきったあとの達成感も大きいです。また、授業を始めたばかりの頃は学生と英語で会話をしていたのが、授業が進むにつれて日本語を積極的に使って話しかけてくれるようになったり、マナー講座を受けてから先生へのメールやメッセージが丁寧になったりと、授業や授業外活動で伝えたことが活かしていることを感じられるのもやりがいのひとつです。このように文化や慣習の違いを素直に受け入れ、取り入れてくれるところはこの国の人々の尊敬するところであり、それが活動のしやすさにも繋がっています。



さらに、これは協力隊の大きな魅力のひとつだと思いますが、自分がやってみたいと思ったことや新しい取り組みにどんどん挑



戦できる環境にも、とても感謝しています。配属されてから授業外での文化活動や学習支援が少ないことに課題を感じていました。日本語教育というと日本語を教えることが仕事のように感じる方も多いと思いますが、実は授業外活動も学習者のモチベーションを向上・維持させるための大切な仕事です。日本で日本語を学ぶ場合、教室外でも日本語を見たり聞いたりする機会は大いにありますが、それに比べて海外で日本語を学ぶ学習者は、教室を一步出たら自然に日本語に触れる機会はありません。ですので、教室内の活動のみで日本

語学習のモチベーションを向上・維持していくには厳しいものがあります。そのため、そのような環境下でもなるべくたくさん日本語や日本文化、日本人に触れる機会を提供し、楽しく日本語を学んでもらえるよう、日本人とお話する日本語カフェや、季節のイベント、日本の生活に必要な講座などを企画し、授業外活動の充実を図っています。参加した学生からの評判は良いですが、もっと幅広く学生の参加を促して、なるべく多くの学生にその機会を提供していくことが今後の課題です。

日本とは違った仕事の進め方やペースの中で活動をするのは大変なときもありますが、それでも日本語教師としての第一歩を、マレーシアで、そして協力隊として踏み出せたことは、私にとってとても貴重で大きな経験だと思っています。これからの隊員活動でも、様々な課題に向き合い、悩みながらも楽しむことを忘れずに、いろいろ挑戦をして、日本語教師としても一人の人としても、たくさんのことを学んで吸収していきたいです。



協力隊まつり (2019 年 4 月 20・21 日)



マレーシア OB、自国生活の楽しみ方？

常木春枝（昭和 51 年度 1 次隊 婦人子供服）

最近、古参を問わず、帰国してしばらくたった元隊員と話をしていて気づくこと。何となく自国内に自身の居場所がなさそうだったり、戻った古巣でこんなはずではなかったよな～というような居心地の悪さを感じていたりする風情がただよっていること。

居心地の悪さゆえに、結果として、自身が生き生きできる居場所を見つけ、自信の持てる自分を取り戻すために、かなりの年数を過ごしてしまうのが元隊員の多くが経験することなのかもしれない。かくいう私自身がそのような理由もあって、帰国後もう一度シニア隊員生活をした。しかし、帰国したら、かつて味わった気分に戻ってしまっただけで、結局、ある程度自己満足のできる居場所は、日本（自分がはじき出されていると感じる国）の中で、自分なりに見つけていくしかないと感じるのに 10 年ぐらいかかってしまった。



脳活性ヨガでの筆者

その先ぶれは、結婚して子どもを育てていく中で、自分の視点が一般的な主婦の目線や考え方とかなりのギャップがあることに気づいたことから始まった。よく言われる「普通は…」という言われ方に同意できない私は、「普通の基準って何？」といつも感じていた。だが、その答えを探そうとすると、いろんな場所や集まりの時に質問を人より多くすることになってしまい、挙句代案まで出す羽目になっていった。それまでは、質問などをする人はひどく少なく感じていたが、口火を切ってみると、意外にも私の持論に賛同する人も多いし、それをきっかけに深く考えてみようとする人も多いことに気づいた。それにより、日本人の多くが口火を切ることをすごく高いハードルに感じる性格を持っていることを再認識させられた。

自分の意見をハッキリ言えないと、「同意している」あるいは「特に異論がない」と誤解されることに繋がると協力隊員は経験から学ぶ。自分の考えや思いを言葉にしてははっきり説明できないと、まわりには分かってもらえないのだ。だが、そのことは自分の国では、比較的異端のこととして、はねつけられることが多い。だから、自国にいるにも関わらず、自分の意見や考え方を受け入れられるチャンスを見つけるのに、ものすごいエネルギーを必要とする。それゆえに、世間では自分の意見を言わなくなっていて、OB 会の中でだけ同好の士を見つけてホッとしたりする人や、逆に、OB 会にさえ背を向ける人も多いのかなと思う。だが、当人は気づいていないかもしれないが、協力隊の二年間は自分の意見やアイデアを出し続けた時間だったはずである。そこで培った発信力もあるはずだ。OB の皆さんには、自分の考えを伝え、周りに影響を与える力が必ずあると私は思っている。居場所が見つからないでいる人は、それにまだ気づいていないだけなのである。

さて、自身を振り返ると、私がそれを強く認識することになったのは、娘が小学校一年時の初めての PTA 総会参加の時だ。終了間際に「他に何か意見がある方はいらっしゃいますか？どんなことでもよろしいので、何か？」と言われ、その頃流行っていた先割れスプーンの使いづらさが自分の家庭で話題になっていたこともあり、「現在給食時に使用中の先割れスプーンを、普通のスプーンに代えませんか。フォークの代わりはお箸で代用できるので。その方が、食べにくさから来る姿勢の悪さを改善できるのでは？」というような発言をした。返答として、「スプーンの購入費用がない」と言われたが、「今はスプーンのない家庭の方が珍しいぐらいなのだから、家から持参すれば費用の問題は生じない」などのやりとりをしたと思う。それで、何事もなく粛々と終わるはずの総会が騒然となり、『スプーンおばさん』



手話サークルの定例会の様子（2018.11）

などのやりとりをしたと思う。それで、何事もなく粛々と終わるはずの総会が騒然となり、『スプーンおばさん』

として全校のPTA会員に知れわたった。それをきっかけにPTAに関わることになり、PTA活動が終わった後に転居した地でも、子ども関連の地域福祉活動を仕事として30年近く続けていくことになった。

持論をハッキリ言うことができ、なお且つ、その関係者から「困っているから相談に乗って！協力して！」と言われた時、それに努力を惜しまないのも協力隊員に共通していることだと思う。それは協力隊期間が終わっても、自国でも、おおいに発揮できる。それが帰国後の協力隊OBがいつでも始められる自国での協力隊活動かもしれないと思っている。

第5回総会開催案内

第5回マレーシア会総会を下記要領で総会を開催いたします。参加をお待ちしています。総会は2年に1回の開催です。できるだけ多くの方々の参加を願っています。万障繰り合わせての参加をお待ちしています

日時：令和元年9月29日（日）15時～18時30分

受付開始：14時

場所：JICA 地球ひろば（市ヶ谷）2階 202AB

プログラム：15:00～15:30 総会

15:30～16:30 講演会

講師：峰村史世（講師はパラ水泳日本代表チーム監督、および MINEMURA

ParaSwim Squad ヘッドコーチ

平成9年2次隊 水泳）

17:00～18:30 懇親会 **差し入れ歓迎！**

（地球ひろば内、J's カフェ）

懇親会費：一人3500円、ただしご夫婦で参加の場合は、二人で6000円。子どもは無料です。

申し込み：電話：090-7186-1065

メール：malaysia@ics-together.com

郵送：右下住所まで

申し込み締め切りは8月末日です。

プログラムや開催要領は、国際協力サロンのwebサイト（下記）上に随時、掲載いたします。

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

協力隊まつり2019 出展

協力隊まつり2019が4月20日（土）、21日（日）の両日、市ヶ谷のJICA地球ひろばで開催されました。当会も出展、隊員の活動の写真を掲示し、マレーシアの物品販売をいたしました。まつりの様子は今会報の4ページ、5ページに掲載しています。まつりを体感してください。

（まつり写真：前島明、まつり写真編集：高橋明美）

寄付のお礼・ありがとうございました！

大西益吉郎氏（49-2）より12,000円のご寄付をいただきました。いつもありがとうございます。活動費として、大切にに使わせていただきます。なお、寄付は随時受け付けています。よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番018、普通口座 5161134 です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会
代表 白山 肇

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形で送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在560余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会

会長 白山肇

〒162-8433

東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5

JICA地球ひろば メールボックス51

TEL：090-7186-1065（国際協力サロン）

MAIL：malaysia@ics-together.com

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

2019年6月30日発行